

## 私の「コロナ中間総括」＝小国綾子

1/30 毎日新聞



これまでのコロナ禍を総括してください——。作家で演出家の鴻上尚史さんに頼み、24日朝刊「論点」で彼のインタビュー記事を書いた。彼いわく、コロナ禍で日本では「世間」が暴走し、同調圧力と相互監視が強まった。結果、「自粛警察」や「マスク警察」まで現れたけれど、その行き過ぎに気づく人も増えた、と指摘する。

そこで今回は、私もコロナを「中間総括」してみようと思う。

この4年間は「人の抱える事情はこんなにも違う」ということを痛感する年月だった。友人には、マスクを拒んだ人もいれば「マスクしてない人は怖い」とおびえる人もいた。「ワクチンは周囲の人のためにも打つべし」と唱える人もいれば「安全か信じられない」と

接種しない人もいた。自粛度合いも人それぞれ。基礎疾患のある人、介護や子育て中の人、医療従事者、学校教師、演劇や音楽がなりわいの人。事情はみんな違い、誰もがぎりぎりの選択をしていた。

「それぞれの選択が尊重されるべきだ」。私はそう繰り返し記事に書いたけれど、心に余裕がない時や不安な時は、他人の選択に心がざわつくものなのだと知った。自覚できてよかった。異なる考えを持つ人とも折り合える方法を探すことの大切さを学べたから。

2020年夏、まだ人々が「職場で感染第1号になりたくない」「感染より周囲の目が怖い」と言っていた頃、私は発熱した。PCR検査前夜、医療従事者の知人が「結果なんてどうでもいい。元気になって早く会いたい」と言ってくれた時はうれしくて泣いた。

23年6月、私はとうとう感染し、しかも何人かに感染させた。「ごめん」と謝る私に友人は言った。「お互い様だよ」「謝っちゃだめ。次に感染した人がまた謝らなきゃいけないから」

確かに「世間」は暴走したけれど、それにあらがうかのように人々の「個」がきらめき、まぶしい瞬間だったたくさんあったのだ。

「不要不急」という言葉のお陰で奪われたくない、手放したくないものがかえって明確にもなった。「感染する・させる」可能性がある中、それでも時にリスクを冒し、あるいはリスクが最小限になるよう必死で工夫し、会い、おしゃべりし、一緒に歌った。思えばそれが私の大切な「個」だったのだ。(オピニオン編集部)